

令和5年度特色入試問題

《文学部》

「学びの設計書」に関連する論述試験

「学びの設計書に関連する論述試験及び提出書類」についてA～Cの3段階評価

(注意)

1. 問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は表紙のほかに3ページある。
3. 解答冊子は表紙のほかに2ページあり、そのうち「ます目」の部分が解答欄である。なお、別に下書き用紙2枚を配布する。
4. 試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。
表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
5. 解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
6. 解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
7. 解答冊子はどのページも切り離してはならない。
8. 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。解答冊子は持ち帰ってはならない。

問 次の文章を読み、そこで述べられている人文社会科学に対する筆者の見解についてどう考えるか、あなたが学びの設計書に書いたことと関連づけて述べなさい。(800字以内)

一般的に、「何かに役に立つ研究」の動機は「Xのために役立つからYを研究したい」といったかたちで表明されます。すると、内容はどうであれ、その人の関心はXとYとに分散していることになります。場合によっては研究対象のYよりXのほうが大事なことすらあるかもしれません。

それに対して「とにかくYを研究したい」という場合、その人は基本的にYのことしか考えていないはずです。すぐに役立たないとされる研究の多くは、このように研究対象自体への純粋な関心により成り立つものが多いように思います。

自然科学の基礎研究なら、Yのところになんらかの自然現象が入ります。人文社会系の研究の場合、そこには人間社会に存在する対象があてはまります。私自身のこれまでの研究に引き寄せて考えると、それはたとえば「一七～一八世紀のヨーロッパにおける学問の分類方法」であったりします。

私は、見たことも実際にその場に身を置いたこともない遠い時代、場所にいた人びとや、その思考様式などが明らかにされていくことに知的興奮を感じます。

自分の研究がなんの役に立つかと問われれば理由をあげることはできますが、本音を言うとそれは二次的なものです。本来の動機の根本は、「とにかく対象を理解したい」という気持ちでしかないからです。それは自分の中ではその対象への愛にも似た感情です。

近年、このような対象への関心に重きを置く研究に対して、人びとの許容度が相対的に下がっていると感じます。少なくとも「Xのために役立つからYを研究したい」のXに「現代の日本社会」を入れることを強く求める人はその傾向があります。

ところで、人文社会系の研究は使いようによってはかなり役に立ちます。むしろ、役に立ちすぎるから不穏という事例すらあるくらいです。

第二次世界大戦中、米国軍の戦時情報局は対日本戦略のため日本文化研究をおこなっていました。そこに勤務していた人類学者のルース・ベネディクトの研究は終戦期における米政府の方針に影響を与えたといわれます。当時のトルーマン大統領の側近には米軍による戦後統治の一環として天皇制の即時解体を求める声もありました。しかし彼女は米軍の占領が混乱に終わるのを避けるためには、天皇制の維持が必要と進言したのです。彼女の研究は戦後すぐに『菊と刀』(一九四六年) という題名で出版され有名になりました。

ベネディクトはもともとアメリカ先住民の文化人類学的研究をしていました。日本語は話せず、戦時中なので日本への訪問もありませんでした。彼女は英訳

された日本関連文献や、英語のできる在米日系人、通訳を介した日本人捕虜へのインタビュー等を通じて研究をおこなったのです。その内容には現代でも高い評価があります。しかし他方では、実際の日本社会の時代や地域ごとの多様性を無視して、日本文化に対するステレオタイプを示すに留まった研究との批判も浴びました。

軍の要請で日本を研究したベネディクトが研究対象にいかなる感情を抱いていたのか、私はよく知りません。ただ一つ言えるのは、彼女がその研究により「天皇制維持による無条件降伏」という、当時の日本人為政者層にとって妥協可能な交渉ラインを探し当てたということです。日本研究としては緻密でも十分でもなかつたかもしれません、時代の求める内容ではあり、それゆえにアメリカにとって「役に立つ」研究だったと言えるでしょう。

人社系の研究は人間の価値観や文化、アイデンティティの問題をよく扱います。こうした研究が広い範囲の人びとに認知され、なんらかの目的に「役に立つ」ときに何が起りうるのか、私たちはもっと考えなければいけないと感じます。一足早く人文社会系が科学・技術・イノベーション政策の本格的な振興対象となつた欧州においては、そのことが強く意識され始めています。

ノルウェイの社会システム・モデリングセンター所長を務めているF・シャルツ氏は宗教研究を専門としていましたが、コンピューターサイエンスの研究者たちと共同研究をおこない、過去に起きた実際の宗教紛争の情報を用いて、社会システムをモデリングしました。それにより、どのような条件で、ある宗教コミュニティが勢力を広げたり、コミュニティ同士の敵対関係が起きたりするなどをシミュレーションできるようにしたのです。

シャルツ氏らの研究自体は、宗教紛争という対象に関する純粋な関心にもとづいていたはずです。しかし彼ら彼女らは自分たちのモデルが紛争解決や社会不安を減らすための政策助言に有効であることも意識しており、実際にそのことをアピールしてもいます。

また、彼ら彼女らは自分たちの研究の危うい面にも気づいています。たとえばそれは対宗教過激派テロ戦略への応用など、軍事転用も可能な要素を秘めているのです。ゆえにシャルツ氏は、人文社会系の研究者は自らの研究の倫理的基準をしつかり考えなければいけないとも述べています。その主張は、研究者たちがヨーロッパの科学政策の中で人文社会科学の果たすべき役割を総括した二〇一三年のヴィリニス宣言*とも重なる部分があります。

日本でも科学技術基本法が改正され、人文社会科学が科学技術イノベーション政策の対象となることが決まりました（二〇二一年四月施行）。要は人文社会系も社会生活や経済活動のため「役に立つ」という認識が政策レベルでも広まり始めています。

同時に、私は悩ましい気持ちも感じます。確かに、貧困問題やジェンダー不平等、環境問題など、複雑化する現代社会の課題を解決するにあたり人文社会科学は欠かせません。むしろ今までの政策があまりにもそうした研究への参照を欠いてきたと思うくらいです。

しかしそのことは認めつつも、研究者の側が素朴にキラキラした瞳で一生懸命「役に立つ」研究ばかりを追いかけようとするのも危ういと感じます。というのも、ここまで学問の有用性が強調される世情自体が不穏であるからです。あたかも研究者は何かの闘いに「動員」されようとしているかのようです。

無論、その闘いは武力をともなう戦争というよりは、国際的な市場競争という闘いであったり、あるいは不平等など社会的な不正に対する（それ自体はなされべき）闘いであったりするでしょう。世界はいま、不安定で苦痛に満ちた場所になっています。そのため研究者を前線へと呼びかける声が高まっているのでしょう。

ただ、だからこそ私は、研究があまりにも易々^{やすやす}と「動員」されではならないとも思うのです。本来、学問は何かの道具になるべきではなく、それ自体が目的であるべきもののはずだからです。

さらに言えば、私たちの知性には限界があります。「社会のために」というとき、「社会」という言葉の背後に特定の集団が隠れているのか、それともそれが人類全体なのか判別のつかないことがしばしばです。知の探究の本質を取り違えたうえで、さらに非人道的な取り返しのつかない振る舞いをすることがあるかもしれません。こうした愚行の抑止のためにも、「役に立たない」学問には常に一定の役割が与えられるべきでしょう。

*ヴィリニュス宣言 二〇一三年九月、ヨーロッパの人文社会系研究者たちがヴィリニュス（リトアニア共和国首都）に集まり、まとめた宣言。イノベーションや経済に価値が置かれる現代社会において、人文社会科学の研究が果たすべき役割や貢献の可能性について九つの主張が展開されている。

（隠岐さや香「人文社会科学は「役に立つ」ほど危うくなる」（柴藤亮介編『「役に立たない」研究の未来』柏書房、2021年所収）より。一部省略）

2

4

8

4

